****
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」　第 342 号
－環境・農業・食べ物など情報の交流誌－
2012.12.14（金）発行　　山崎農業研究所＆編集同人
＜キーワード＞
環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所＆『電子耕』編集同人が編集・発行。
http://www.yamazaki-i.org
**********発行部数 1121 部**********

前回発行から、数ヵ月たってしまいました。
配信再開いたしますので、読者の皆様、よろしくお願いします。
衆議院選挙を間近に控えていますが、「原発」「TPP」など、争点にかかわる
記事が集まりました。

□　目　次　□----------

＜巻頭言＞　3・11「あの時」を思い覚悟の選択を　小泉浩郎
＜特別寄稿＞　第 1 回脱原発サミット in 茨城（10 月 14 日、東海村）
～原発による地方自治破壊に抗して～　　塩谷哲夫
＜山崎農業研究所　第 143 回定例研究会＞　速報（要旨）
テーマ：(1) 原発から生ずる放射性廃棄物の危険
映画「10 万年後の安全」（2009 年）を見る
(2) TPP の問題点（資料討論）
＜編集後記＞　つながる時代をつくるということ
――浅見彰宏（ひぐらし農園主宰）著
『ぼくが百姓になった理由〈わけ〉』（コモンズ刊）

＜巻頭言＞　3・11「あの時」を思い覚悟の選択を

総選挙が明後日に迫った。世論調査は、国民の多くの関心は景気・雇用対策だという。もちろん喫緊の課題だが、同時にこの国の行方、この国のあり方を問う選挙でもある。

3・11。全国民は、驚愕と悲惨の中で茫然自失のまま立ちすくんだ。「あの時」から 1 年 9 ヶ月、行く末が見えず木枯らしに身を屈めている中での選挙戦である。政党が乱立、美辞羅列の政見公約、弁舌巧みな政見放送がただ虚ろに響

く。

あの大災害が、我々に何を問うたか。失った多くのいのちと被災による苦悩の数々は、この国のあり方への警鐘である。地方任せの安全・安心は崩れ、科学は万能でないことを教え、経済一辺倒の成長神話は地に落ちた。最高の頭脳を結集した復興構想会議は、被災 3 ヵ月後「大自然の脅威と人類の驕りの前に現代文明の脆弱性が一挙に露呈した」とした。

「あの時」国民の誰もがそう思った。その反省に立つなら今回の選挙は「今来たこの道」でそのままアクセルを踏みこむことではなく、スピードを落としこの国の行く末を考え「新たな行く道」へとハンドルを切ることであろう。問われている「憲法」「TPP」「原発」、これだけの判断でもこの国のあり方を左右する。

ライシャワー元米国大使は、日本の「近代化」と「伝統・文化」は、共にすばらしい。だが、日本人が世界にもっとも誇るべきものは、山の向こうのもう 1 つの日本、田園の静かな佇まいだと言った。20 年後、50 年後、「あの時」を乗り越え、新しく脱皮し世界をリードするモデルとなった。今回の選挙は、後世にそう評価される歴史的覚悟を示す時である。

小泉浩郎
山崎農業研究所事務局長
yamazaki@yamazaki-i.org

＜特別寄稿＞　第 1 回脱原発サミット in 茨城（10 月 14 日、東海村）
～原発による地方自治破壊に抗して～

日本原子力研究開発機構（本部：茨城県東海村）は 11 月 9 日、大洗の研究開発センターの材料試験炉の配管から放射性物質を含む水滴漏れが発生したと発表した。9 月には東海研究開発センターの再処理施設で、また 10 月には大洗で同様の事故が発生している。さらに、9 日には東海村の廃棄物安全試験施設で火災が発生した。なぜ、原子力関連施設ではトラブルが続くのだろうか？

機構側は、いつもの決まり文句で「環境や従業員への影響は無い」“小さい”事故だと言うが、「どうして？」と思うほど、その発生頻度が多い。一般の化学工場でもこんなにトラブルが頻繁に起こっているのだろうか。

これらは地元紙や大新聞の茨城版を通じて報道されるので、茨城県民の私は知ることができる。他の原発や原子力関連施設でも同様の事故が起こっているのではないだろうか。
今のところ、原子炉本体の核分裂反応箇所ではないところの事故ではあるが、いつ、なんどき、本体の大事故につながらないかと空恐ろしい限りである。福島第一原発の核燃料メルトダウンも、冷却装置が停止したことが発端だった。

東海村は、1999 年 9 月 30 日、日本初の原子力災害である JCO 臨界事故に見舞われ、2 名が死亡し、667 名が被爆した恐ろしい経験をしたところである。
その当時、「住民の命が最優先だ」と住民避難を決行した村上達也は、村内の原子力企業や地元事業者からの再稼動を求める声が絶えない厳しい環境の中で村長 4 期目を務めている。そして今、東海第二原発の廃炉を求め、「脱原発をめざす首長の会」の世話人として全国自治体の首長たちに脱原発の共闘を呼びかけている（2012.4.28 設立）。

この東海村で、10 月 14 日に「脱原発サミット in 茨城」（主催：茨城の環境と人を考える会議）が行われ、約 550 名が参加した。
パネラーは東海村の村上村長、東電・経産省のプルサマール導入に抗して知事を抹殺されたと訴えている前福島県知事の佐藤栄佐久、小泉政権の国策に抗して「合併しない宣言」をした前福島県矢祭町長の根本良一の自治体首長経験者の 3 氏。そしてコーディネーターは評論家の佐高信であった。

原発が住民の生命を危険に曝す許されざるものだと言うことは周知の前提で、佐高は、自治体を守る首長として、国家権力に抗して自治の理念と住民を守って戦ってきたパネラー達の経験を引き出しながら討論をリードした。

原発と自治体との関係は村上村長の発言に象徴されていた。「原発は金と札束と権力で、反対があれば機動隊を導入して強行的に造るもので、計画段階から電源交付金として金が入ってきて、それで地域にある産業は壊滅させられ、原発に依存しなければやっていけない地域が作られていく」。

根本は総務省から“矢祭を血祭りにする”という脅迫に屈することなく、住民の暮らしを守るために、国や県を相手に柔軟な戦術を駆使しながら正論を貫いた取り組みを語った。「自治体が大きくなればいいわけではない」。「アユ釣りのできる清流を守りたくって、20 億円のダムを造って 2 千億円のダム計画を中止させた」（佐藤前知事が紹介した）。「原子力の学問を究めることは非

常に大事だ。しかし、その結果をどう使うかは政治の判断だ」と言う。その信念で、現在は全国民の生命を守ろうと「脱原発首長の会」代表を務める。

佐藤は「県は国の言いなりではなく、常に市町村、住民の側に立たないとやっていけない」という県知事としての経験から「原発は自治を踏みにじる」と国策原発を糾弾した。そして、「1000 年経っても 2000 年経っても、福島を戻してくれ」と言う気持ちで、1 年、1 年の対応をする必要があると訴えた。

私たちは、合併や原発などの国策による地方自治破壊に抗して闘う、したたかで誇り高い自治体の首長経験者達の経験を聞くことができた。

塩谷哲夫
山崎農業研究所幹事・東京農工大学名誉教授
yamazaki@yamazaki-i.org

＜山崎農業研究所　第 143 回定例研究会＞　速報（要旨）
期日　：2012 年 12 月 8 日（土）
場所　：新宿区四谷 3－5　不動産会館　5F
テーマ：(1) 原発から生ずる放射性廃棄物の危険
映画「10 万年後の安全」（2009 年）を見る
(2) TPP の問題点（資料討論）

---

(1) 原発から生ずる放射性廃棄物の危険

原発廃棄物にはさまざまな半減期をもつ放射性物が含まれる。セシウムの半減期は 30 年であるが、長いものでは何万年もかかる。含有量によるが、放射能が生物に無害になるには 10 万年と見なされる。これを安全に廃棄処理する場合、その後の管理は 10～100 年くらいはできるだろうが、10 万年は、人類発生の起源までの時間に相当する。誰が長期間の保管に責任を持つのであろうか。

現在、世界にはこの廃棄物が 25 万トンもある。この処理試験に廃棄物をガラス玉で固め、地中深く埋設する「オンカロ・プロジェクト」がフィンランドで進められている。この計画の記録映画が 2010 年のパリ国際環境映画祭で大賞を受賞した。この映画を見て感じたことを参加者で話し合った。

原発を廃止すれば、それで済む問題ではない。各政党の選挙公約には廃棄物

処理問題について触れていない。日本の場合、電力料金が原発が「一番安いことになっているが、このような安全管理を考えると、とても引き合わない。わが国でも試験的に 2 ヶ所くらいのところで深い縦坑（500m）を掘って始めている。電気代にはこの処理費が組み込まれている。ガラス玉として封じ込めるとしても、この扱いも極めて危険で、日本ではその保管場所も定まっていない。

原発事故後の対応についてはチェルノブイリの前例があるが、福島は今後の対応策として貴重である。原子炉開発が、原爆製造とも関係深い。この映画で廃棄物処理の難しさがわかった。

（2）TPP の問題点
（資料討論：アジア太平洋地域における経済連携の現状、
民主党経済連携報告書、など）

「例外無き関税」をうたう TPP は日本農業にとって致命的である。TPP では参加各国の国内事情や文化・風土的特性などを全く考慮されていない。農業大国は輸出で有利になり、日本のような小規模農業では、とても国際競争に勝てない。

わが国の政府は今までの WTO などの交渉で、農業の環境への多面的機能を評価し、主張してきたが、TPP ではこのことが議論されない。各政党の主張にも、この環境問題は見られない。

他のアジアの国々では貿易量は少ないので、アメリカは日本の TPP 参加を強く求めている。中国がこれに入らないのでは環太平洋とは言えない。アメリカの最大の狙いは貿易拡大によって自国の景気低迷を回復することであり、TPP は農産物やサービス産業など、あらゆる分野で自国の権益を拡大し、同時に中国を牽制することにある。

開発が下火になって、環境保全に対する関心が薄れてきた現在、農業規模拡大など、経済面だけの議論だけでなく、自然の保護・保全で日本の美を守ることも考えなばならない。TPP の議論は活発でないのは、政府からの情報不足にある。大いに内容を明らかにして議論を広める必要がある。
（文責　安富・田口）

＜編集後記＞　つながる時代をつくるということ
——浅見彰宏（ひぐらし農園主宰）著
『ぼくが百姓になった理由〈わけ〉』（コモンズ刊）

著者の浅見彰宏さんは 1969 年の生まれ。いわゆるバブル世代の一員である。大学卒業後、大手鉄鋼メーカーに就職したが、仕事を通じて社会の矛盾に思いをめぐらすようになる。それは拡大する市場経済であり、そのために生まれる貧困や格差、環境問題であった。

自身の生き方に疑問をもった浅見さんは 4 年で会社を辞め、農の世界へ、もっといえば有機農業の世界に飛び込んでいく。「農村という舞台で、自然と向き合って働くことこそが、本当の労働だろう」と。有機農業の先達である埼玉県小川町の金子美登氏と出会い、金子氏の霜里農場での研修後、定住の地として選んだのは福島県山都町（現・喜多方市山都町）であった。

「自分には農業をとおして発揮すべき社会的役割があるはず」と浅見さんは言い切る。社会は変わらなくてはならない。しかしそのためにはまず自分が変わらなくてはならない。そして、社会の基本は自分が暮らす地域であり村であるが、そこでの問題は自分一人の力では解決できない——。そういう思いに支えられた、地域に対するはたらきかけはおのずから「つながる」ことに結びつく。

地元の農業用水である元木上堰を維持するためのボランティアの募集、地域通貨（LETS 会津）の取り組み、山都町のような中山間地で暮らし続けられる仕組みや地域の収入につながる仕組みをつくることをめざした「相川百姓市」の開催など。いずれも「つながる」こと、「つなげる」ことが鍵になっている。

「これからは、広がるのではなく、つながる時代です。人と人とがつながる。人と自然とがつながる。別の表現をすれば、上るのではなく、下りる時代です」と浅見さん。脱原発の時代、脱グローバリゼーションの時代、そして脱成長の時代の内実もまた、この「つながる」ことにあるのではないか。

浅見彰宏（ひぐらし農園主宰）著
『ぼくが百姓になった理由〈わけ〉』
コモンズ刊、四六判／316 ページ

本体価格 1900 円＋税
2012 年 11 月

2012 年 12 月 14 日
山崎農業研究所会員・田口　均
yamazaki@yamazaki-i.org

山崎農業研究所編・発行／農山漁村文化協会発売
『自給再考――グローバリゼーションの次は何か』
（発売：2008/11　定価：1,575 円 ）
http://shop.ruralnet.or.jp/b_no=01_4540082955/
たくさんの書評・紹介記事をいただいています。感謝・感謝です。

◎辻信一さん（文化人類学者、ナマケモノ倶楽部世話人。明治学院大学教授）
グローバルの次は何？ ～卒業するゼミ生諸君へ
http://www.sloth.gr.jp/tsuji/library/column64.html
◎戎谷徹也さん（大地を守る会）
ブログ：大地を守る会のエビちゃん日記 “あんしんはしんどい”
「自給率」の前に、「自給」の意味を
http://www.daichi.or.jp/blog/ebichan/2008/12/16/
◎吉田太郎さん（長野県農業大学校教授、執筆者）
キューバ有機農業ブログ 自給再考の本が出ました
http://pub.ne.jp/cubaorganic/?entry_id=1822182
◎関良基さん（拓殖大学政経学部）
ブログ：代替案　書評：『自給再考　－グローバリゼーションの次は何か』
http://blog.goo.ne.jp/reforestation/e/cb22650fa39384bdd22b61440fa81fa0
◎大内正伸さん（イラストレーター・ライター）
ブログ：神流アトリエ日記（3）「書評『自給再考』」
http://sun.ap.teacup.com/applet/tamarin/20081204/archive
◎ブログ：本に溺れたい グローバリゼーションの次は何か
http://renqing.cocolog-nifty.com/bookjunkie/2009/01/post-841e.html
◎森川辰夫さん
NPO 法人 農と人とくらし研究センター／資料情報
http://www.rircl.jp/shiryo.htm
◎日本農業新聞／書評

（2009/01/19 評者：日本農業新聞編集委員 山田優）
http://yamazaki-i.org/
（画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい）
◎小谷敏さん（大妻女子大学）
日本海新聞コラム「潮流」／「自給」の方へ（2009/01/31）
http://blog.goo.ne.jp/binbin1956/e/c895f6619b30ba7725e264b4daa75219
◎白崎一裕さん（(株) 共に生きるために）
月刊とちぎ V ネットボランティア情報 vol.158／しみん文庫
http://yamazaki-i.org/
（画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい）
◎塩見直紀さん（半農半 X 研究所、執筆者）
ブログ：半農半Xという生き方～スローレボリューションでいこう！
立国集。
http://plaza.rakuten.co.jp/simpleandmission/diary/200812270000/

◎お願い「＜読者の声＞の投稿規定・メールの書き方」

1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
3、1 回 1 テーマ、10 行位に。
4、ホームページを持っている人は、文末に URL を。
5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。
http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html
インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

次回　343 号の締め切りは 12 月 25 日、発行は 12 月 27 日の予定です。

＜本誌記事の無断転載を禁じます＞
****
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」　第 342 号
最新号・バックナンバーの閲覧

http://archive.mag2.com/0000014872/index.html

http://nazuna.com/tom/denshico.html

購読申し込み／解除案内

http://www.yamazaki-i.org

2012.12.14（金）発行　　山崎農業研究所＆編集同人

mailto:yamazaki@yamazaki-i.org

**********ここまで『電子耕』**********